

兼載独吟俳諧百韻、宗祇独吟疊字俳諧百韻の再検討

——連歌式目との関係について論じ、

疊字俳諧百韻の錯簡の可能性を指摘す——

勢 田 勝 郭

守武千句の自跋には「此道の式目いまだ見ず」という記述が見える。「此道」とは勿論俳諧のことと、この記述より俳諧の式目は当時まだ存在していなかったことが知れる。しかし、式目は存在していなかったにしても、「俳諧の連歌」はそれよりずっと以前から作られており、宗祇、兼載といった超一流の連歌師たちもまた俳諧を嗜んでいた。それでは、式目なしに詠まれていた宗祇や兼載の時代の俳諧連歌の去嫌はどのようなものであったのだろうか。それが、本稿が取扱う最初の問題である。

兼載の独吟と伝えられる「花よりも実こそほしけれ桜鯛」を発句とする俳諧百韻がある。これは発句からも知れるように純然たる俳諧体の作であり、しかも百韻全句が伝えられている点において、守武千句以前の俳諧連歌の去嫌の実態を知る上でこの上ない資料といふべきものであるが、この作品について次のような見解（注1）が述べられている。

作法はというと、連歌では七か所出すべき月を初裏三句目に二つ、発句で花を詠んでいるかと思ふと、三裏の二句目と名残ノ表の五句目で詠んでいるというありさまで、全く、連歌の作法にこだわらず、気随氣ままに詠んでいる。もちろん本連歌の余興として、詠み捨てに近い気軽さでのびのび詠んだからであろう（下略、傍点勢田）

この見解は、連歌でよく言われる所謂「四花七月」の規定にこの俳諧百韻が適っていないことを指摘し、それをもってこの作品が連歌の作法を無視していることの証としようとするものである。しかし、連歌が四花七月の作法に従って作られるようになるのは、私の調査した所では兼載の没後五、六十年ほどの時からのものであり、それ以前にも水無瀬三吟のように四花七月に適った作品はあるが、それは結果的に偶然そうになっているだけのことである。兼載の

時代ではどうであつたかという、まず「花」は、折を嫌ひ四句以下でありさえすれば、三句でもよかつたし、二句でも式目違反ではなかつた。従つて、この作品に「花」が三句（私の考えでは二句、注2）しか存在しないことは、決して連歌の式目無視を意味するものではない。また「月」は、互いに七句以上を隔てていさえすれば、一面に月の句が二度詠まれようと、また月の句のない面がいくらあろうと構わなかつた。従つて百韻一卷中「月」の数は、最高十三句まで可能で、下限は別段月の句が一句も詠まれなくとも、それは決して式目違反ではなかつたのである。と言つても常識的な線はやはりあり、純正連歌の場合五く十句の範圍にほとんどおさまる。實見に触れたうち「月」の最も少ない連歌は難波田千句の第二「何船」で、これには「月」は三句しか存在しない（連歌集書本による）。この俳諧百韻の「月」の数は、それよりも更に少なくなつた一句であり、それはやはり——式目違反ではないが——普通ではない。しかし、普通でないと言ふだけなら、この作品は最初から普通ではない——つまり、百韻全句を俳諧体で付けたおそうとするものなのである。しかも、その俳諧体たるや、「はだかにならばさていかにせむ／人の物我ふところにぬすみ入」とか、「うしろむきてぞせをかめける／こかつしき流石に道をしりぬらん」という付合のごとく、極めて

卑俗性の濃厚なものである。そのような卑俗性の濃厚な俳諧体で百韻を付けたおそうとすれば、どうしても花鳥風月よりも世事人心の有様に多く題材が求められることになる。特に月は、卑俗さとは縁遠い静寂・清澄のイメージを喚起する点において、花などよりはるかにこのような場合取りあげにくい題材であると言えよう。それが、結果的にこの作品における「月」の数を僅か一句にとどめた根本の要因であつたのではあるまいか。「月」が一句しか存在しないことは確かに普通ではない。しかしそれは式目違反では決してなく、この作品の根本の意図を考慮すれば、まず納得できることだと私には考えられる。

以上、兼載の俳諧百韻の花・月の配置が當時としては連歌の規則に違反したものではないことを示した。従つてこの作品がどの程度連歌の規則に沿っているか、あるいは外れているかは、別な点から検討しなくてはならない。

連歌の実際の場において付句をなすにあたって第一に注意すべきことは、同一の語や表現・同種の句材・同類の句についての回数・間隔・連続の制限に違反しないよう、うまく前句に付けるということである。この点について、主要な所を調査してみよう。句意の理解できない所や、判断に迷つた点も少なからずあるが、表1がその一応の結果である。これより、次のような連歌式目に対する違反の存し

ていることが知れる。

①「旅」の語は一座二句物があるが、初ウ1(初折裏の第一句の略。下同)、二オ13、三ウ5と三句に用いられている。

②名オ12と三ウ13と、春の句が二句で去てられている。

③初オ8と初オ8と、五句以上を隔つべき居所が四句を隔つのみである。

④三ウ8と三ウ13と、五句以上を隔つべき釈教が四句を隔つのみである。

⑤名オ5と名オ12と、七句以上を隔つべき同季(春)が六句を隔つのみである。

⑥二オ2と二オ7と、五句以上を隔つべき同字の語(ただ)が三句を隔つのみである。

⑦同じく「する」が、二ウ12と三オ2と、三句を隔つのみである。

⑧同じく「人」が、二ウ13と三オ4と、四句を隔つのみ。

⑨同じく「持」が、三ウ8と三ウ11と、二句を隔つのみ。

⑩同じく「無」が、三ウ13と名オ1と、一句を隔つのみ。

⑪同じく「無」が、名オ1と名オ4と、二句を隔つのみ。

⑫同じく「杖」が、名オ14と名ウ3と、二句を隔つのみ。

⑬初ウ1と初ウ3と、二句以上を隔つべき人倫が打越で詠まれている。

⑭同じく初ウ11と初ウ13と、人倫打越。

⑮同じく初ウ13と二オ1と、人倫打越。

⑯同じく二ウ5と二ウ7と、人倫打越。

⑰同じく二ウ7と二ウ9と、人倫打越。

以上で十七例を数える。この値は、純正連歌に対して同じ調査をした場合に得られる値(普通数例。十例を越えることはまず無い)に比べ、かなり多い。その点確かにこの作品は普通でない(普通でないと云えば、他に「つゝ」留りが上句に用いられていることも——それも三句も——式目違反ではないが目立つ)。しかし、この事実をもってそのままストレートにこの作品が「気随気ままに」作られたものだということの証とできるかと言えば、私の答は否である。一つ一つの違反例について、検討してみよう。

⑤は七句去りが六句、③④⑧は五句去りが四句と、それぞれ規定より一句近くなっている例であるが、このような例は純正連歌においてもしばしば見られることで、とりたてて難とするに足りない。また、①の「旅」の語が三句に用いられているのも同様である。例として宗祇の代表作の一つ「三島千句」の第三「何人」をとりあげることにする。そこでは、「時雨の末の雪のしら雲(三ウ10)」「霜こほる山のかたぎしつたひ忙(名オ3)」と、同季(冬)が六句を隔つのみで詠まれているし、「牛かふ野中日は暮にけり(三オ12)」と「真萩ちる野」のさをしかけさ鳴て

（三ウ3）、「また」「こえゆけばなを霜まよふ春の山（三オ3）」と「見ぬ国里の旅の末々（三オ8）」などのように、五句以上を隔つべき「同字」や「旅の句」が四句を隔つのみで詠まれている例も見える。更に「うつりかはるはたゞ旅のそら（初オ6）」「うき旅は誰あはれみもうけまほし（二オ1）」「見ぬ国里の旅の末々（三オ8）」と、「旅」の語が三句に用いられてもいるのである。

⑥⑦⑧⑨は「ただ」「する」「持」「無」といった語が三句、あるいは二句を隔つのみで詠まれている例であるが、このような印象の弱い語の場合には、純正連歌においてもかなり例がある。例えば「三島千句」の第二「何船」では「今こんの末におもへばいさしらず（二オ5）」「春をやおもふしがの海士人（二オ8）」、第九「朝何」では「又いかならん人のゆくすゑ（初ウ8）」「跡ふるき井手の歎冬又やみん（初ウ11）」のごとく、「思」あるいは「又」といった語が二句を隔つのみで詠まれている。

⑩は「杖」の語が二句を隔つのみで詠まれている例である。「ただ」などと違ひこのように印象の強い語が僅か二句去りで詠まれている例は、純正連歌において私の調査した限り他になく、従ってテキストに問題がないなら、これはこの作品と連歌式目との関係において強い難とせねばならない。しかし名ウ3の「きりきざむ漆の杖のかせ者に」

という句の中の「杖」の語は、一句の意味の上からも、前（かれたる殿のすめる川ばた）後（手足をみればかよげなりけり）の句との付合の上からも、用いられねばならない必然性は感ぜられず、誤筆の可能性が強いと私は思う。大胆な推測をすれば、「杖」は「枝」とあるべきではあるまいか。そして、前句の「かれたる」に対して「枝」、「殿」に対して「かせ者」、「川」に対して「漆」と（注3）語を選び、漆を切り刻んでできるかき、かせ者と一句を構成し、それに対して「手足が痒そうだ」と付句をしたのではあるまいか。以上「杖」は「枝」の誤りだと私は考える。

次に②は春二句捨ての例であるが、春・秋の三句以上連続ということが明文化されるのは文亀元年の肖柏による式目改訂においてであり、この俳諧百韻の成立をそれ以前とするか、以後とするかによって、若干その性格は異なる。しかし、いずれにせよそれよりかなり以前から春と秋の句は必ず三句以上連続させるという意識で連歌は作られており、この連続の規定に対する違反は、今まで見てきたような間隔の規定に対する違反に比べ、余程稀なものである（注4）。従ってここに春二句捨ての例が見えることはやはり普通ではない。しかし、例は間々あり、兼祯独吟と推定される難波田千句の第七「何田」からも、

朽のこる果をば頼む陰もなし

雑

涙すゝむる秋風の声

秋

物おもへば雲のはたても身に入て

秋

われをせめくる人の面かげ

雑

のごとき例（二オ7ゝ10）があげられる。従って、これも決定的な難とはなし得ない。

⑬ゝ⑰は人倫が打越で詠まれている違反五例である。この百韻には同字五句去りに対する違反も、既に見たように六例（⑫を除いて）存在したが、同字五句去りに対する違反は純正連歌においても五例程度あることもあるから、それとは事情は異なる。人倫が五度も打越で詠まれているというのは、例外的許容というには数が多すぎる。従って連歌式目の「可嫌打越物」中の「人倫」の規定は、この俳諧百韻では無視されているというべきである。しかし、それは、先にも述べたように、極めて卑俗性の濃厚な俳諧体で全句を付けとおそうとすればどうしても世事人心の有様に題材を求めざるを得ず、その必要上やむを得ずなされた無視であり、この作品の根本の意図を考えればまず納得できることであり、決して連歌式目全体の無視につながるものではないと私には考えられる。

以上のごとく考えれば、連歌の規則との関係上、この作品で強い難となるのは、⑩の「無」の語が打越で詠まれているという一点のみになる（注5）。従って、兼載の俳諧

百韻に対する私の調査の結論を言えば、次のごとくである。

この俳諧百韻を同時代の純正連歌と比較した場合、確かに普通でない点もいくつか存し、式目との関係では、違反の数はやはり多いと言うべきである。しかし「気随気ままに」詠まれたものでは決してなく、連歌の規則にできるだけ従おうとしているようであり、違反の程度は、⑩の一例を除いて、純正連歌においても、許容される範囲のものばかりである。ただし、人倫については、この作品の根本の意図のために、必要上やむを得ず規則は無視されていると考えられる。

宗祇にもまた「花にはふ梅は無双の梢かな」を発句とする疊字独吟百韻がある。これは『玉梅集』に「ある人の所望にて、疊字の俳諧独吟に百句せし時」として発句が採られているものであるが、これについて同じ調査をしてみよう。その結果が表Ⅱであるが、連歌式目に対する違反は次のごとくである。

①初オ6、二オ4、名オ4と、「旅」の語が三句に用いられている。

②三句以上続けねばならない春の句が三オ1の一句で捨てられている。

③同じく春の句が名ウ5ゝ6と、二句で捨てられている。

④二オ11と二ウ3と、七句以上を隔つべき同季（春）が五句を隔つのみである。

⑤同じく二ウ14と三オ1と、同季（春）が僅か一句を隔つのみである。

⑥二ウ14と三オ7と、七句以上を隔つべき「涙」の語が六句を隔つのみである。

⑦二オ9と二オ11と、三句以上を隔つべき聳物が打越になつてゐる。

⑧三ウ13と名オ1と、三句以上を隔つべき降物が打越になつてゐる。

⑨二ウ14と三オ2と、五句以上を隔つべき述懐の句が打越になつてゐる（注6）。

⑩所謂てにをはの類で句を終わらせる場合、同種のもは二句以上を隔てねばならない。しかるに二オ13と二ウ1と、て留めの句が打越になつてゐる。

⑪同じく三オ9と三オ11と、に留めの句が打越になつてゐる。

⑫初オ6と初ウ3と、同字の語（知）が四句を隔つのみである。

⑬同じく「来」が、初ウ7と初ウ10と、二句を隔つのみ。

⑭同じく「知」が、初ウ13と二オ2と、二句を隔つのみ。

⑮同じく「待」が、三オ8と三オ11と、二句を隔つのみ。

⑯同じく「無」が、三オ11と三ウ2と、四句を隔つのみ。

⑰同じく「見」が、三ウ11と名オ1と、三句を隔つのみ。

⑱同じく「心」が、三ウ14と名オ5と、四句を隔つのみ。

⑲同じく「無」が、名オ3と名オ6と、二句を隔つのみ。

⑳同じく「有」が、名ウ1と名ウ5と、三句を隔つのみ。

以上の二十例を数える。兼載の俳諧百韻よりも更に違反は多いわけであるが、数の多寡よりも、重要なのはその違反の程度である。実は、事情は兼載の場合と決定的に違つてゐるのである。

①、③、⑥、⑫～⑳の計十二例は、兼載の俳諧百韻の場合と事情はかわらず、決定的な難とはなし得ない（ただし、この作品において同字は五句去りではなくて二句去りと意識されてゐる可能性も強いが）。しかし、残る八例のうち④⑦⑧はともかくとして——紙幅の都合上具体例をあげることはしないが、同様の違反は純正連歌でも極く稀に見られる——⑩⑪のようにて留めやに留めの句が打越になつたり、⑤のように同季が打越になつたり、⑨のように述懐が打越になつたり、また②のように春の句が僅か一句で捨てられたりという例は、違反の程度が甚しすぎ、純正連歌において（私の調査した限り、確実な）例のないものである。そんな甚しい違反が五例もあるということは、とりもなおさず、この作品が連歌の規則に拘泥せず、自由に付

け進められたものであったことを示しているということになる。それでよいか。

先に私は兼載の俳諧百韻についてそれが連歌の規則にできるだけ従おうとしていると述べた。しかし、宗祇の疊字百韻を検討した結果は、それと矛盾するものである。この矛盾をどう理解すればよいであろうか。まず一つ、矛盾をそのまま受け入れ「兼載は連歌の規則に従って俳諧百韻を作り、宗祇はそれに拘泥せず疊字百韻を作った」とストーリーに考えることができる。また「当時の俳諧は連歌の規則に拘泥しないのが普通で、兼載の作品が規則に従っているように見えるのは偶然的な結果に過ぎない」とも考えられよう。また「当時の俳諧は（独自の式目がなかったから）連歌の式目にできるだけ従うべきものであったが、宗祇の疊字百韻の場合、何らかの事故によって原形が損われ、その結果連歌の規則を無視しているような形となった」と考えることもできよう。

前二者なら論はここで尽きる。しかし、私は最後の考え方が正しいと考える。何となれば、宗祇の作品が連歌の規則に拘泥していないと判断する根拠となった決定的な違反例五例のうち、⑪を除いた四例までが、面の継ぎ目をまたいだり（⑤⑨⑩）そこで途切れたり（②）している違反だからである。

結論を言おう。私は、この作品の現在の形は二折の表裏が逆になっていると考える。連歌の懷紙やその写しを綴じたり、それを巻子本に仕立てる際に、面の順序を違えてしまうのは有り得ることである（注？）。今、論に係りのある初折裏から三折表にかけて、現在の形の接続状態を示すと、次のごとくである。※（一）内は特に甚しい違反の数

初ウ

頼む余命は扱も幾ほど

行末もはや底弱に年たけて

二オ（十三句略）

帰るならひの春の周章

これならで断簡もなき世を捨て

二ウ（十三句略）

老のなみだは懈怠こそせね

永き日を活計ながら暮さばや

三オ

私が本来のものと考える形は次のごとくである。

初ウ

頼む余命は扱も幾ほど

これならで断簡もなき世を捨て

二オ（十三句略）

老のなみだは懈怠こそせね

違反一例。

違反二例。

違反四例。

違反なし

違反なし

「行末もはや庭弱に年たけて

二ウ（十三句略）

帰るならひの春の周章

永き日を活計ながら暮さばや

三才

違反なし

連歌式目との関係では、私の推測する形の方がよいことは議論の余地があるまい。隣りあうことになる二句間の付合も、現在の形だと、初折裏から二折表はまづうまくゆくが、二折の表から裏、二折裏から三折表は、どことなくぎくしゃくした感がある。特に「春の一日をのんびり暮したい」という三折冒頭の句の前に置かれるものとしては、現存状態の「とめどなく老の涙が流れる」という句は、深刻すぎると言えよう。ここはやはり「帰るならひの春の周章」の句が来てこそピッタリするというものである。他の二か所も、私の推測する形だと非常にうまく付いている。

以上のように、宗祇の疊字百韻の現在の形が本来の形の二折の表裏を違えたものであることは、私にはほぼ確かなことのように思われる。それを本来の形に戻すと、全体の違反例は十三例、うち甚しいものは⑩の一例のみということになる。これは兼載の俳諧百韻の場合より少ない数である。そして、兼載の作品において人倫の規定が守られてなかったように、この作品においては同字五句まりの規定が

二句まり程度まで緩められていると考えれば、後は⑩の一点を除いて、ほぼ連歌の規則にできるだけ従おうとしているとすることができるように私には思われる。

以上、先学の御叱正を願う次第である。

注1 即峻康隆氏 小学館版日本古典文学全集『連歌俳諧集』解説二三～二四ページ。

注2 発句「花よりも実こそほしけれ桜鯛」には、「花」という語もあるが「桜」の語もある。このような句は一座三句物の「桜」の句とされ、花の句とはされないのが昔からの習慣である。

注3 『連珠合璧集』の中に「川」と「漆」が寄合であるという記述がある。

注4 この点については「連歌における春・秋の句の三句以上連続の制約化の時代について」（津山工業高等専門学校研究紀要 第十八号）で詳細に検討した。

注5 「無」が打越になっている例としては、有名な三無瀬三吟から「見しはみなふるさと人の跡もなし（初ウ13）」「色もなきことの葉をだに哀しれ（二オ1）」という例があげられる。しかし、「跡もなし」が「跡もうし」となっている本が多く、確実な例とはし得ない。他に、「三島千句」などからも数例があ

げられるが、いずれも誤筆の可能性のあるもので、
確実な例ではない。

注6

三才の「永き日を活計ながら暮さばや」も述懐と
考えると、連続三句以内と規定されている述懐の句
が二ウ14から三才4まで五句連続する結果となる。
違反の程度はこのほうがひどい。

注7

例えば最近金子金治郎氏が紹介された本能寺蔵「落
葉百韻」など。

※兼職独吟俳諧百韻、宗祇独吟疊字百韻のテキストとして
は、伊地地鉄男氏が書陵部紀要第三号に翻刻なさったも
のをういさせていただいた。

研究室受贈図書雑誌目録V

国文研究 第三十号（愛媛国語国文学会）

国文研究と教育 第四号（奈良教育大学）

国文白百合 第十号（白百合女子大学）

国文目白 第十九号・第二十号・第二十一号（日本女子大
学）

国立国語研究所年報 31

古代研究 第十三号（早稲田古代研究会）

語文 第三十八輯（大阪大学）

語文 第五十一輯、第五十二輯（日本大学）

語文論叢 第八号（千葉大学）

駒沢短大國文 第十一号

相模国文 第八号（相模女子大学）

佐賀大國文 8、9

三十六人集改訂（土曜会）

滋賀大國文 第十八号

実践国文学 第十九号、第二十号（実践女子大学）

斯道文庫論集 第十七輯（慶應義塾大学附属研究所）

就実語文 創刊号、第二号（就実女子大学）

樟蔭国文学 第十八号（大阪樟蔭女子大学）

上智大学国文学論集 第十四号

女子大國文 第八十八号、第八十九号（京都女子大学）

女子大國文 第三十一号、第三十二号（大阪女子大学）

叙説 昭和五十五年（奈良女子大学）

史料と研究 第十一号（札幌大学）

新樹 第四輯（梅光女学院大学大学院）

人文学論集 第十四号（仏教大学）

人文学論報 146（東京都立大学）

成蹊国文 第十四号（成蹊大学）

成城国文学論集 第十三輯（成城大学）

説林 29（愛知県立大学）

| 表 I | | | | | | | | | | (初折表) | | | | | | | | | | 季 | | | | | | | | | | 恋 | | | | | | | | | | 旅 | | | | | | | | | | 述懷 | | | | | | | | | | 光物 | | | | | | | | | | 降物 | | | | | | | | | | 聲物 | | | | | | | | | | 名所 | | | | | | | | | | 神祇 | | | | | | | | | | 釈教 | | | | | | | | | | 山類 | | | | | | | | | | 水辺 | | | | | | | | | | 居所 | | | | | | | | | | 衣類 | | | | | | | | | | 鳥獸 | | | | | | | | | | 魚 | | | | | | | | | | △ | | | | | | | | | | 植物 | | | | | | | | | | 人倫 | | | | | | | | | | 句表現 | | | | | | | | | | 七句法物 | | | | | | | | | | 違反 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|-------|---------------|-------------|--------------|----------------|---------------|---------------|-------------|--------------|---|----------------|---------------|-----------------|-------------|--------------|--------------|----------------|--------------|----------------|----------------|--|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (初折表) | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (初折表) | 花よりも実こそほしけれ桜鯛 | 霞のあみを春のひたるさ | 永日の暮ぬる里に鞠をけて | ほころひかちにみゆるかみしも | 主殿と狂言なからむしりあひ | いそひて鳥をくはんとそする | 鷹犬の鷹よりさきに走出 | 門のまはりに立まはりけり | 1 | たひ人の宿をも終にこすかれて | あちなけなるゆふくれのそら | こしをれの祖父に似たる三日の月 | 秋やはつらんわかきかた | 露ほとも用れぬかまひこと | 後には中をたかわれそする | 若僧のはしめのほとは思ひあひ | しのひくにつまをたつぬる | さひを手を取なかへるも口惜や | はたかにならはさていかにせむ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|------------|-------|---------------|---------------|-------------|---------------|---------------|--------------|---------------|----------------|------------|----------------|------------|-----------------|-------------|--------------|-------|-------------|--------------|---------------|---------------|
| 2 | 1 | (二折衷) | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (二折衷) | 14 | 13 | 12 | 11 |
| うたえとさらに声そしいける | 猿楽の笛と大鼓を聞計 | | 留守におかるゝ身こそつられ | 旅の道さはり有なと祈念して | おかみてとをれ堂寺の前 | 鬼たにも仏をみれば逃そする | いそくあゆみに捨るみのかさ | 露時雨ひつしの時や暗ぬ覧 | さるのかしらは紅葉しにけり | 秋は只よろつの物をくはゝれて | 鋤持人はおほはらの里 | 畑をうつ身は壘染によこれつゝ | 法師とみれば在家入道 | 世の中をふせうなからも捨にけり | 唯恋しきは古さとのつま | 傾城はあれとも宿に独寝で | | 銭をはもたぬ道の悲しさ | 急をも動せぬ船のわたし守 | しらす顔なるつらのにくさよ | 人の物我ふところにぬすみ入 |
| | | | | | | | | 秋 | 秋 | 秋 | | | | | | 恋 | | | | | |
| | | | | 旅 | | | | | | | | | | 述 | 述 | 恋 | | 旅 | 旅 | | |
| | | | | | | | | 降 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 名 | | | | | | | | | | |
| | | | | | 釈 | 釈 | | | | | | | 釈 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | 山 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 居 | | | | | | | | 水 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | △ | 猷 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | △ | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 人 | | | | | | | | 人 | 人 | | | 人 | 人 | | | 人 | 人 | |
| | | | | て | | | | ん | | て | | | | | | て | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | ① | | | | | | ⑥ | | | | | ⑥ | ⑮ | | | ⑭ ⑮ | | ⑭ |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|-----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|--------------|---------------|-------|------------|----------------|---------------|----------------|--------------|----------------|---------------|-------------------|-------------|----------------|-------------|-------------|--------------|
| 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (名残裏) | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 |
| 寺もお里もおさまれるとき | こかつしき流石に道をしりぬらん | うしろむきてそせをかゝめける | 拍子打風呂の吹てと聞よりも | 手足をみれはかよけなりけり | きりきさむ漆の杖のかせ者に | かれたる殿のすめる川はた | 白波の太刀をも持す弓もなし | | 杖を頼てこゆる山みち | つく／＼とむね打つみて永日に | つはなぬきくふ野への春けき | 里よりもわらんへ共の数多来て | 坊主は常にいさめこそすれ | 絵にかける五百羅漢の成をみよ | 顔をにかめつほうをすちめつ | やせものゝすこのみとものあらまれて | はや梅干をもたし行すゑ | 秘蔵する花をは根より引にけり | 面目もなき春のさひしさ | 振舞もせぬ客人に年越て | たゝめてたしといふ計なり |
| | | | | | | | | | | 春 | 春 | | | | | | | 春 | 春 | 春 | |
| | | | | | | | | | 旅 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 積 | 積 | | | | | | | | | | | | 積 | 積 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 山 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | 水 | 水 | | | | | | | | | | | | | | |
| 居 | | | | | | | | | | | | 居 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

[illegible]

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|----------------|-----------------|------------|---------------|------|------------------|-------------|----------------|-------------|--------------|--------------|---------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-----------------|------------|--------------|-------------|---------------|
| 2 | 1 | (二折衷——正しくは二折表か) | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (二折衷——正しくは二折表か) | 14 | 13 | 12 | 11 |
| 隠れてすまは随分のやま | これならて断簡もなき世を捨て | | 帰るならひの春の周章 | 花守の枝おらさしと警固して | へ一句欠 | このまゝにあたら霞霧のよもはれし | 涙をさそふ秋かせは奇恠 | むら雲にしはしは月の隠居して | こなたも故障あたり憂中 | 人はなと我を上表するや寛 | なにとゝむれと承引もなし | 又こと乗卒爾なからも云置て | あし纏頭や旅のうかれめ | 暮してもいかゝ勝事の草枕 | 日の中をたにしらぬ生涯 | 行末もはや庭弱に年たけて | | 頼む余命は扱も幾ほと | 後の春又参会もしらぬ身に | 桜の雪や不慮にふるらん | 風あまり狼籍になる花ちりて |
| | | | 春 | 春 | | 秋 | 秋 | 秋 | | | 恋 | 恋 | 恋 | | | | | | 春 | 春 | 春 |
| | | | | | | | | | | | | | 旅 | 旅 | | | | | | | |
| 述 | 述 | | | | | | | 光 | | | | | | | 述 | 述 | | 述 | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | △ | |
| | | | | | | 聳 | 聳 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 山 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 木 | | | | | | | | | | | | | | | 木 | 木 | |
| | | | 人 | | | | | | 人 | | | 人 | | | | | | | 人 | | |
| | て | | | て | | | | て | ん | て | | | | | て | | | | に | ん | て |
| | | | | | | 涙 | 月 | | | | | | 枕 | | | | | | | | |
| | ⑩ | | ⑩ | | | ④ ⑦ | ⑦ | | | | | | ① | | ⑭ | | | | ⑭ | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-------------|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|---------------|-------|--|--------------|-------------|-----------|----------------|--------------|----------------|-------------|---------------|-------------|-----------------|-------------|----------------|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (三折表) | | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 |
| さらに身の休息もせず恋しきに | たゝ忙然と人そまたるゝ | 露泪そても大略ぬれ渡り | 夢の聊爾は秋のならはし | 雲間より月は光陰する物を | やまは究竟のかくれ所そ | 捨けるに身の進退の極て | 我生前のおもひてはなし | 永き日を活計ながら暮さはや | | | 老のなみたは懈怠こそせね | 在明の明鏡ならず臙夜に | 霞の雨を隠蜜にふる | 風ならて所見はいかゝ山さくら | さてもまことはしらぬ隔心 | おりふしは等閑なしと思ふまで | みてもなくさむ文は賞翫 | 雪にとふ人は懇志の至りかや | その眺望もかはるふる里 | かせこゝに荻のあるかと披露して | 秋の訴訟はさらにうき中 | 月ななゝ丁寧してかまたるらん |
| | | 秋 | 秋 | 秋 | | | | 春 | | | | 春 | 春 | 春 | | | | 冬 | | 秋 | 秋 | 秋 |
| 恋 | 恋 | 恋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 恋 | 恋 | 恋 |
| | | | | | | 述 | 述 | 述 | | | 述 | | | | | | | | | | | |
| | | | | 光 | | | | | | | 光 | | | | | | | | | | | 光 |
| | | 降 | | | | | | | | | | 降 | | | | | | 降 | | | | |
| | | | | 聲 | | | | | | | | 聲 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | 山 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 衣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 人 | 人 | | | | | 人 | | | | | | | | 木 | | | | | 草 | | | |
| に | | | | | | て | | | | | | に | | | | | | 人 | | て | | ん |
| | | 涙 | 夢 | 月 | | | | | | | 涙 | 月 | | | | | | | | | | 月 |
| ⑪ | ⑫ | ⑬ | | | | | ⑭ | ⑮ | | | ⑯ | ⑰ | | | | | | | | | | ⑱ |

[illegible]

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|----------------|-------------|---------------|------------|----------------|-------------|---------------|-------|---------------|--------------|------------|-------------|------------|----------------|---------------|---------------|--------------|--------------|-----------|--------------|------------|
| 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | (名残裏) | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 |
| 冥慮にかなふ人は神妙 | 今の御代いつの時より超過して | わすれかたきは春の英雄 | 咲そむる花に際限よもあらし | あら荒涼や武蔵野の原 | 遠てもちかきは富士の奇特にて | きのふけふとて過る光陰 | 文字の宿誰も稽古の有へきに | | わかきほとこそ身に器用なれ | むら萩の花族は今の盛にて | 松や紅葉のかけそ逍遙 | 何事も遊行ほしき月の暮 | はしめて人の籌策も哉 | そのあたり徘徊しつゝ明す夜に | しのへは機嫌はかりかたきよ | 恨にもけには思ひに和陸して | もとのちきりの媒介はなし | 先とへは心風屑の宿なるに | 道遠けなる旅の窮窟 | 松もなき野は平均に草枯て | 竹の不審は雪の青葉に |
| | | 春 | 春 | | | | | | | 秋 | 秋 | 秋 | | 恋 | 恋 | 恋 | 恋 | | | 冬 | 冬 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | 旅 | 旅 | | |
| | | | | | | | | | | | | 光 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 降 | |
| | | | | 名 | 名 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | 山 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 木 | | | | | | 草 | 木 | | | | | | | | | 草木 | 竹 |
| 人 | | | | | | | 人 | | 人 | | | | 人 | | | | | | | | |
| | て | | | | て | | に | | | て | | | | に | | て | | に | | て | に |
| | | | | | | | | | | | 松 | 月 | | | | | | | | 松 | 竹 |
| | | ③ | ③ ②① | | | | ②① | | | | | | | | | | ①⑨ | ①⑧ | ① | ①⑨ | |

注1 表中に△で示したのは、語としてはそれに相当するが、句の仕立によりそれをのがれているものである。例えば表Ⅱの初葉第十二句には「雪」の語が含まれているが、これは本体は「桜」であるので、降物にはならないということである。

注2 下に①く⑭ ①く⑳として示したものは、本文中にあげた連歌式目に対する違反の例である。特にはなはだしい違反と判断されるものは、二重丸で囲んだ。

注3 全体的に一句としての意味のとりにくい句や、判断に迷った点も多く（特に恋・述懐）、誤りの多からんを恐るるものである。

注4 表Ⅰの名残裏第三句の「杖」は本文でも触れたように「枝」、また、表Ⅱの名残表第二句の「雪」は多分「霜」の誤りかと思われる。

（津山工業高等専門学校講師）

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅵ

専修国文 第二十七号、第二十八号（専修大学）

短大論集 第六十六集（関東学院女子短期大学）

地域文化研究 第四号（甲南大学）

中央大学国文 第二十四号

中古文学論叢 第一号（早稲田大学大学院）

中世文学研究 第七号（中四国中世文学研究会）

中世文芸論稿 第七号（龍谷大学）

通信 第三十九号、第四十号、第四十一号、第四十二号

（東京外国語大学）

鶴見大学紀要 第十八号

東海学園国語国文 第十九号、創刊二十号記念、第二十一号（東海学園女子短期大学）

同朋国文 第十四号（同朋大学）

富山大学人文学部紀要 第四号

富山大学教育学部紀要 第二十九号

南山国文論集 第五号（南山大学）

日本語と日本文学 第一号（筑波大学）

日本文学 第四十五号（立教大学）

日本文学研究 第十六号（梅光女学院大学）

日本文学研究 第二十号（大東文化大学）

日本文学研究 第十二号（帝塚山学院大学）